

過古

梶井基次郎

母親がランプを消して出て来るのを、子供達は父親や祖母と共に、戸外で待っていた。

誰一人の見送りとてない出発であった。最後の夕餉ゆうげをしたためた食器。最後の時間まで照していたランプ。それらは、それらをもらった八百屋やおやが取りに来る明日の朝まで、空家の中に残されている。

灯が消えた。くらやみを背負って母親が出て来た。五人の幼い子供達。父母。祖母。——賑にぎやかな、しかし寂しい一行は歩み出した。その時から十余年経った。

その五人の兄弟のなかの一人であった彼は再びその

大都會へ出て来た。そこで彼は学校へ通った。知らない町ばかりであつた。碁会所ごかいしよ。玉突屋。大弓所。珈琲コーヒ店。下宿。彼はそのせせこましい展望を逃のがれて郊外へ移った。そこは偶然にも以前住んだことのある町に近かつた。霜解け、夕凍じみ、その匂いには憶おぼえがあつた。ひと月ふた月経った。日光と散歩に恵まれた彼の生活は、いつの間にか怪しい不協和に陥つていた。遠くの父母や兄弟の顔が、これまでになく忌いまわしい陰を帯びて、彼の心を紊みだした。電報配達夫が恐ろしかつた。

ある朝、彼は日当ひあたりのいい彼の部屋で座布団を干していた。その座布団は彼の幼時からの記憶につながれて

いた。同じ切れ地で夜具ができていたのだった。——
日なたの匂いを立てながら縞目しまめの古りた座布団は膨れ
はじめた。彼は眼を瞠みはつた。どうしたのだ。まるで覚
えがない。何という縞目だ。——そして何という旅情
……

以前住んだ町を歩いて見る日がとうとうやって来た。
彼は道々、町の名前が変わってはいないかと心配しな
がら、ひとに道を尋ねた。町はあった。近づくにつれ
て心が重くなった。一軒二軒、昔と変わらない家が、
新しい家に挟まれて残っていた。はつと胸を衝つかれる

瞬間があつた。しかしその家は違つていた。確かに町はその町に違いなかつた。幼な友達の家が一軒あつた。代が変わつて友達の名前になつていた。台所から首を出している母らしいひとの眼を彼は避けた。その家が見つかれば道は憶おぼえていた。彼はその方へ歩き出した。彼は往来に立ち竦すくんだ。十三年前の自分が往来を走つている！——その子供は何も知らないで、町角を曲つて見えなくなつてしまつた。彼は泪なみだぐんだ。何という旅情だ！それはもう嗚咽おえつに近かつた。

ある夜、彼は散歩に出た。そしていつの間にか知ら

ない路を踏み迷っていた。それは道も灯もない大きな暗闇であつた。探りながら歩いてゆく足が時どき凹へこみへ踏み落ちた。それは泣きたくなる瞬間であつた。そして寒さは衣服に染しみ入つてしまつていた。

時刻は非常に晩おそくなつたようでもあり、またそんなでもないように思えた。路をどこから間違つたのかもはつきりしなかつた。頭はまるで空虚であつた。ただ、寒さだけを覚えた。

彼は燐寸マツチの箱を袂たもとから取り出そうとした。腕組みしている手をそのまま、右の手を左の袂へ、左の手を右の袂へ突込んだ。燐寸はあつた。手では摺つかんでいた。

しかしどちらの手で擱んでいるのか、そしてそれをどう取出すのか分らなかつた。

暗闇に点ともされた火は、また彼の空虚な頭の中に点された火でもあつた。彼は人心地を知つた。

一本の燐寸の火が、焰ほのおが消えて炭火になつてからでも、闇に対してどれだけの照力を持つていたか、彼ははじめて知つた。火が全く消えても、少しの間は残像が彼を導いた――

突然烈しい音響が野の端から起こつた。

華ばなしい光の列が彼の眼の前を過よぎつて行つた。光の波は土を匍はつて彼の足もとまで押し寄せた。

汽罐車の烟けむりは火になっていた。反射をうけた火夫が赤く動いていた。

客車。食堂車。寝台車。光と熱と歓語で充たされた列車。

激しい車輪の響きが彼の身体に戦慄せんりつを伝えた。それははじめ荒々しく彼をやつつけたが、遂には得体の知れない感情を呼び起こした。涙が流れ出た。

響きは遂に消えてしまった。そのままの普段着で両親の家へ、急行に乗って、と彼は涙の中に決心していた。

底本：「檸檬・ある心の風景」 旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

入力：j.utiyama

校正：野口英司

1998年9月19日公開

2005年10月3日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。